

島根県海士町

1. 地区概要等

海士町は、島根半島の沖合い約 60km の日本海に浮かぶ隠岐諸島の中ノ島からなる町。面積 33.5k m²、世帯数 1,114 世帯、2,502 人、老齢人口約 40%。豊かな海産・農畜産に恵まれる一方、離島という地理的特性から、極端な少子高齢化と人口減少が進む。加えて、地方交付税減額による財政状況の悪化などの問題を抱え、島自体の存続の危機に晒されていた。

平成 14 年、現町長が就任し、町を挙げての行財政改革と地域づくり活動を開始。町職員が給与の自主減額提案・実施する行財政改革を進める一方、新たな産業創出、未来を支える人づくりの 3 大施策を進める。離島というハンディを克服する為、地産地消の拡大、高付加価値化・首都圏への販売展開にこだわり、流通促進の場として、フェリーターミナル施設「キンニャモニャセンター」を整備。鮮度を保つ新しい凍結技術(CAS)を導入。運営主体として第三セクター「(株)ふるさと海士」を設立、雇用の増大と定住促進を図る。近年の積極的施策により、平成 16～18 年度の 3 カ年、70 世帯・130 名前後のいわゆる I ターン者を中心に海士町に定住。島外募集した「商品開発・農畜漁業研修生」や、地元民間事業者等の協力を得て、地域ブランド商品「さざえカレー」や「いわがき“春香”」「海士ノ塩」「島生まれ、島育ち 隠岐牛」が生まれている。

また、未来を支える人づくりとして、人間力推進プロジェクト(平成 17・4)チーム創設。【自立心の育成】【海士らしい・新しい価値観の醸成】【郷土愛の育成】をコンセプトに、東京国立市(一橋大学)との交流、新宿日本語学校仏人サマースクール開校、アドベンチャーキャンプ、キャリア教育(職場体験)、修学旅行、井原市児童交流、若者島体験塾(ニート層対象)等々人づくり・交流事業が実施される。

このような活動により、本年度都市と農山漁村交流を通じ新しいライフスタイル 特色ある滞在型モデルの確立「島まるごと人間力向上プログラム 共創・共生社会に向けて」の提案、地域の活性化を目指す「共生・対流の社会実験事業」のモデル地域として指定される。

2. 調査概要

この社会実験事業を活用、海士町のモノづくりを原点にしながら、主に「AMA ワゴン」では、外部の若者と地域の子も達や住民の交流、新宿日本語学校「サマースクール in 海士」での国際交流、これまで実績がある「隠岐吟行ツアー」の文化交流を加え実施する。都市と海士町の交流を通じて、「海士ファン」を増やし、海士町の魅力を島外に発信するとともに、郷土の資源・魅力を再発見し、海士町の活性化・地域づくりに繋げる。それらが、相互の人間力を向上させる取り組みであり、WIN-WIN 関係価値の実証に寄与していきたいところである。

図 1-1 位置・アクセス図

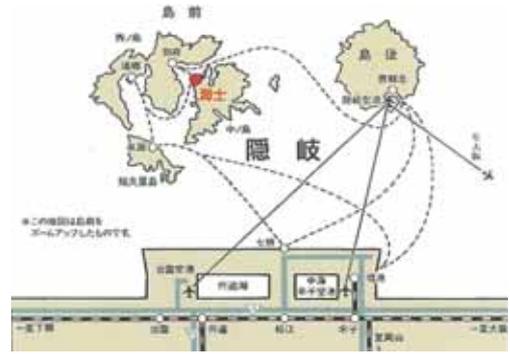


図 2-1 社会実験・実施活動想定

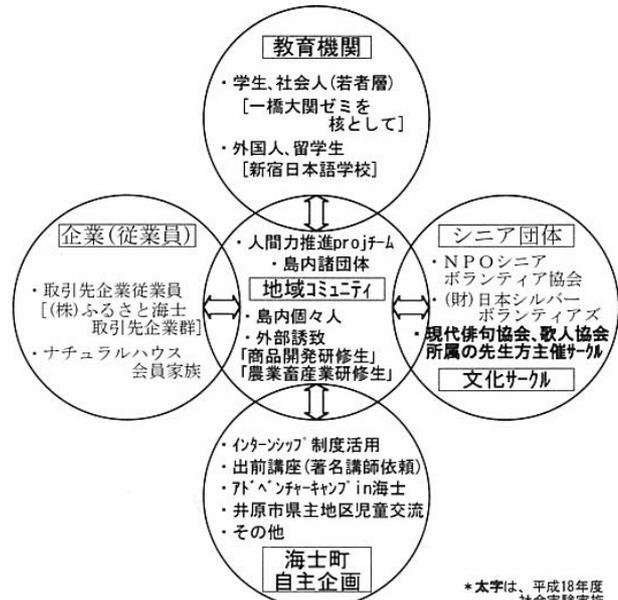
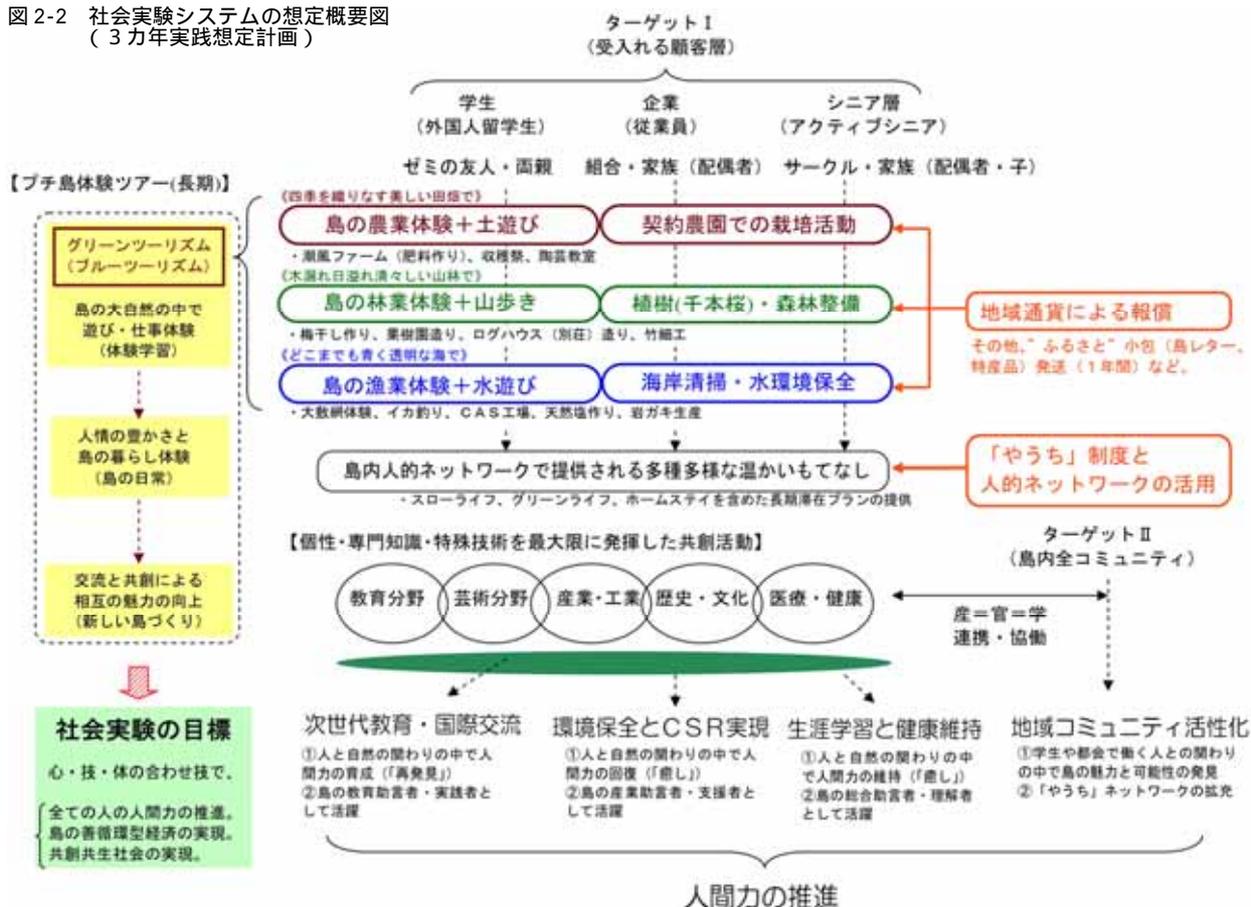


図 2-2 社会実験システムの想定概要図
(3カ年実践想定計画)



(1) AMA ワゴン・出前授業の実施 (国立市への逆ワゴン含む)

平成 17 年、国立市民・一橋大の海士中学校修学旅行受け入れ。その縁から、海士町の主要な取組課題の一つ「教育」を絡め、小・中・高校生の学力と心を育てる。同時に都市と離島との交流及び、一橋大学・国立市との連携を深める試み。

年 5 回+ の出前授業開催 / 超一流講師を海士町へ / 都市から学生専用バスの運行 20~30 歳代の最先端で活躍する人を講師に、小・中・高校で出前授業を実施。同時に東京から海士町へバス (AMA ワゴン) を走らせる。地域づくり志向の人は途中でも乗車、地元住民・来島者相互に WIN-WIN 関係となれるような交流・学習・刺激遇いを行う。

(2) サマースクール in 海士 & 新宿日本語学校留学生海士体験 2006

この交流事業の目的は、東京など都市部では体験しにくい、海士町に残る「日本固有の伝統文化、自然、人情など」を、「同校」を通じて「日本に興味を持つ外国人」に提供すること。外国人と接する機会の少ない海士町の子供達や地元住民に「外国人と触れる機会」を提供することで、国際理解を深める。それとともに、郷土の資源・魅力を、第三者 (外国人) を通じて再発見し、誇りを持てるようにすること。独自の教授法で真摯な学校経営をしている「同校」と海士町の信頼関係を構築することで、首都圏ひいては世界へのチャンネルを創る。それと同時に、同校の教育精神や経営ノウハウなど「海士町の教育へ新しい風」を吹き込むこと等々にある。

サマースクール参加学生は、同校仏事務所にて募集、来島前日に来日。留学生については、同校の紹介と海士町の受け入れという形で実施している。

実施内容については、「同校」が実施する「日本の伝統文化・自然体験を含めた外国人短期留学プログラム」を、海士町が「島まるごと」で全面的にサポートすることと同時に国際交流も実施する。（詳細は、本編「日程表」「記録写真集」参照）

(3) 俳句・短歌「隠岐吟行ツアー」

25年程前、俳人加藤楸邨句碑を隠岐神社に建立、除幕式に金子兜太さん、辻井喬さん、石寒太さんをはじめ、俳壇・歌壇の著名人の来島、当時の役場職員から「隠岐吟行ツアー」企画の相談。単なる歴史・自然、名所・旧跡巡り団体観光ツアーからの脱却を意図したが沙汰闇。10年程前、観光協会職員からこの組織のあり方の変革、隠岐・海士ならではの協会自身企画・文化交流マニア向ツアーへの想いから復活に挑戦。先生方の大いなる賛同を得て、全国に俳句短歌を募集して、一冊の本にまとめ、全国に発信するとともに、選者の先生方と行く「隠岐吟行ツアー」。地元との交流ともてなしを必ず入れ、本年度で第8回の開催を数える。

（平成18年度共生・対流事業のその他活動(海士町自主企画)は、図2-1 社会実験・実施活動想定参照）

3. 調査結果・成果

平成18年度海士町「共生・対流事業」社会実験活動実績は、総合計で、来訪683名、町内3,846名の参加を得ることとなった。

(1) AMA ワゴン・出前授業の実施内容および成果

AMA ワゴンから派生した活動を含む来訪参加者は延べ259名、町内は1,754名を数える。

AMA ワゴン自体は主に、1.若い時期からの産業人材の育成を狙った海士中学校における出前授業と、2.それに合わせてバスでやってくる20~30名の都会の学生の交流事業の二部構成からなる。06年5月~11月に掛けて5回シリーズで行われ、各回講師に加え、延べ100名の学生が来町した。

出前授業は各回講師の専門性を活かし、国際理解、コミュニケーション指導、社会起業、そして最後に1冊の本を作ってみるといった贅沢な内容のシリーズ授業となった。毎回の参加学生はこの出前授業で中学生のグループワークにアシスタントとして入り、中学生と一緒に視点で考えることで、大学生のいない過疎の島（海士町）において、中学生によい刺激を与える形になった。

参加学生はさらに、地元農家・漁師や商店での「一日かばん持ち体験」を行ったり、実際に農業や漁業、天然塩づくりを自ら行ったりなどの各種体験事業を通じて地元の人々との交流を深めた。

その結果、数多くの島ファンを生み出すことになり、AMA ワゴン実施後、海士をめぐって東京・大阪などから自費で海士を再来島する「リピーター」が6割を数えた。AMA ワゴン参加者と、彼らの尽力で2年前に中止になっていた隠岐神社の盆踊りが復活、正月にも町民向けイベントが実現するなど計り知れない効果を生み出している。

これらの成功を支えたのがAMA ワゴン参加者と海士町・島根県関係者など200名で構成される「AMA ワゴン ML」であり、活発な情報交流拠点として機能している。

中学生にも確実な変化が現れてきており、それを察知した地元の保護者の方々からも確実にこのAMA ワゴンに対する理解と支援の輪が広がってきている。地元の若者も目覚めてきており、当初役場関係が中心だった地元の受け入れ態勢も「地元の若い者でやらないといけない」という意識が芽生えてきている。彼ら若者を中心として、各種交流事業や外国

人誘致、地元の若い人材育成を視野に入れた NPO 設立も模索されている。

また、この AMA ワゴンの成功の発展形として、丸 1 ヶ月で全国の 11 農山漁村を巡るバスツアーも計画されている。地域発・地球行きの頭文字をとって「ちち ばす」と名づけられ、海士町はその最終訪問地となっている。

(2) サマースクール in 海士 & 新宿日本語学校留学生海士体験 2006

サマースクール in 海士 2006 の来訪参加者は、仏人参加学生 13 名、同校日本人スタッフ 3 名、仏在住一家（日本人母、年長男児 1 名、小学 2 年生 1 名）計 19 名 新宿日本語学校留学生海士体験 2006 については、同校留学生（韓国人 3 名、中国人（台湾）1 名、マレーシア人 1 名 計 5 名 町内参加者は、両方で 433 名となった。

サマースクールとして同校から提供できるプログラムは、2 年間の経験を通してほぼ確立できたようだ。海士町の自然や歴史、文化、地元住民との交流等の滞在プログラムは、外国人にとっても魅力的であることが、参加者の感想や終了後の繋がり、リピーターの出現などでも明らかとなった。日本の小さな離島で地元の人々と交流しながら日本語を勉強するということは、真の日本を海外にアピールする上でも意義深いことである。

今後も国際交流の機会を拡大しようとする、ホストファミリーを増やすことが重要である。また、交流事業全般を地元住民に理解してもらう為、できるだけ多くの人々に関わってもらえるようなプログラムを工夫してきた。しかし、まだまだ充分には周知されていない。広報、回覧版等様々な方法で地元住民への周知・啓発する必要を強く感じる。

日数や経費上の負担を負ってでも「サマースクール in 海士」を開催しようとする新宿日本語学校側の熱意がなければ継続は不可能であり、受け入れる海士町側においても、よい交流を進める為には、人的・財政的支援体制が必要である。また、行政主導の事業展開を民間主導の転換することも検討しつつ、継続の形を模索すべきである。

離島でしか経験することができないような交流事業であり、これを継続発展させることこそ、国際交流への大きな可能性を期待できるものである。

(3) 平成 18 年度「隠岐吟行ツアー」

俳句・短歌「隠岐吟行ツアー」の来訪参加者は、本年度隠岐俳句大会開催もあり、延べ 300 名強、町内参加者は、33 名となった。

当初からお付き合い願っている石寒太先生を中心に、現代俳句協会、歌人協会所属の先生が次の先生を紹介して下さるなど徐々に広がり、今に至る。二度三度ツアー企画して下さる先生も増える。リピーターとなる先生方や参加者は、自然に感動、四季折々の隠岐ということは勿論、何より“島の人”の人情に触れ、また訪れたいとなると。吟行ツアーに同行。皆さん、一ヶ所をゆっくり時間をかけての吟行、何より島の暮らし、島の人々との交流を求める・・・と感じる。

今後も、吟行ツアーの定番、屋台や野点、民謡などを加え、もっと島の生活を垣間見る企画を。また、島の人達にも、著名な先生方の講話（俳句短歌に拘らず）や句会・歌会の参加、小学校での俳句野外教室などを充実させる。他の文化分野とのコラボレーションを通して、文化的な向上、交流に繋がれば。そして自分たちが住んでいる隠岐の良さを再認識してもらえたら。そんな観光協会自主企画ツアーデザインの試行、そしてツアーデザインセンター創設へと想いを走らせる。

表 3-1 平成 18 年度海士町「共生・対流事業」社会実験活動実績一覧

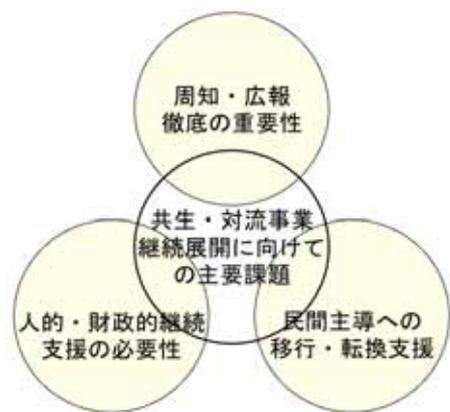
月	日	行事名	内容等	講師・参加者	来訪者	町内関係者	関係団体
5	19~21	第1回AMAワゴン・出前授業	ゲンキ地球(ダマ)NET漢字ゲーム	坂本悠、一橋大、東大、津田塾大、慶応大、大阪産大等	30	82	海士町、海士中
	21~26	俳句吟行ツアー	町内俳句グループ交流	山田信子先生内田紅林、栗本裕生先生遠河31	81	10	観光協会、町内俳句グループ
6	10~12	短歌吟行ツアー	ゲストを迎えて	高田和重先生、島塚あき子先生、藤弘先生、河野裕子先生	64	5	観光協会
7	8~10	俳句吟行ツアー	俳句俳句大会	宮倉利恵先生白鳥文子、伊藤道徳先生白城17、石家大先生長塚、林健先生堀24、藤本謙一先生藤23、加古直也先生若林22、鶴人13	149	10	観光協会、町内俳句グループ
	8~17	サマースクール in 海士	日本語学習、文化交流等	新宿日本語学校教員、フランス人等19人	19	383	海士町、小・中・島前高校
	12~13	出前講座	教員「今の義務教育に必要な事」 福小「理科、科学の語・実験」 海小「数学、パソコン使用」 海小「道徳」	生田茂筑波大学教授	1	126	12:小中教員 13:福小55年、海小3年、海小
	18	出前講座	「先端科学技術とエレクトロニクス」	吉野穂美大阪大学教授	1	222	海士中、島前高校
27~29	俳句吟行ツアー	町内俳句グループ交流	山科豊二先生からまづ	10	8	観光協会、町内俳句グループ	
8	2~22	インターンシップ	桜葉なごみ、おこしけいお等	アネヒ、イノウカ、ダルマシリ立命館アジア太平洋大学	1	41	海士町、桜葉なごみ
	2~27	インターンシップ	キンニヤモニャセンター等	ナディシャーニ、ロゼユリダ爾前大学	1	40	海士町
	4~9	アドベンチャーキャンプ	5泊6日、町外者23名	大学生5名、小5~中3	28	59	海士町、実行委員会
	11~27	インターンシップ	キンニヤモニャセンター等	島下昌重立命館アジア太平洋大学	1	40	海士町
	15	盆踊り	福崎神社盆踊りの復活	一橋大、成蹊大、東立大、ゲンキ地球等	15	800	海士町、実行委員会
	18	漢字ゲーム	漢字ゲーム改訂版	ゲンキ地球(ダマ)NET	10	30	海士町、海士中
	21~24	京大フットサル「ARI」合宿	予ニス、バレー部の指導と対話、練習	京大フットサルサークル「ARI」	17	82	海士中
	24~28	SNK留学生体験旅行	5泊6日(熊本県・参加、片付等交流、お土産)	新宿日本語学校留学生(韓国、台湾、マレーシア)	5	50	海士町
	25~27	井原市児童交流	今年海士町へ来訪	井原児童16、大人9	25	45	海士町、実行委員会、海士児童、保護者
	31~9/3	第2回AMAワゴン・出前授業	演劇指導(SELVの能力)	磯原ひかる、一橋大、明治大、都立大、大阪産大、島大、東立大等	24	165	海士町、ひらまんぼう、海士小、海士中
9	4~25	インターンシップ	共同作業所「さくらの家」、島前高校、おこしけいお等	黒田英菜、内藤和典(立命館アジア太平洋大学)	2	185	海士町、さくらの家、島前高校
	10	シンポジウム立ち上がる福城	「燃える人」メンバー		10	200	福城議員、島根県庁職員、他
	11~10/6	インターンシップ	1000時間体験学習	藤田祥史、角法子、藤野孝、吉田理沙、市野綾子、浜島嘉子、藤本昌克(島根大学)	7	53	教育委員会、海士小学校
19~23	インターンシップ	1000時間体験学習	池永祥三、新免功、藤原島平、山根良介、保徳泰之(島根大学)	5	82	教育委員会、海士中学校	
10	5~8	第3回AMAワゴン・出前授業	産学大講師、社会企業研究室	井上英之	20	142	海士町、海士中、ひらまんぼう
	6	島づくりフォーラム	北川島先生同窓生	北川泉、荒木祥雄、新島茂、倉田亮、庄谷邦幸、日瀬守男、増井幸夫	7	170	福城議員
	21	出前講座	5-お祭り「トレーディングゲーム」	谷口正俊	1	33	教員、町職員、住民等
	22~28	インターンシップ	1000時間体験学習	須山健太、西村真直、田村直、伊藤山香穂、瀧野子(島根大学)	5	92	教育委員会、海士中学校
11	3~5	一橋大学祭、国立市民祭「逆町」	物産販売	海士町民、国立市民、一橋大学生	10	10	海士町、国立市、一橋大学
	18	人権・同和教育公演会	引きこもり若者の劇	京都みらいの会	5	80	教育委員会、同校協
12	25~29	第4回AMAワゴン・出前授業	Studio:a、家島プロジェクト	西上ありさ、一橋大、明治大、慶應、東京理科大学、拓殖大、都立大、京大、愛知教育大、大阪産大、島大、東立大等	26	121	海士町、海士中、ひらまんぼう
	24	岩本悠氏海士町へ転居	1ターン	岩本悠	1		海士町
1	25~1/9	島体験居住	島の年末年始を体験	AMAワゴン参加者を中心として	19	60	ひらまんぼう、医民、小・中学生等
	7	AMAソングイベント	海士の歌を皆で作りを楽しむ	下館道樹(ダラリスト)	80	70	町民
	18~20	インターンシップ	1000時間体験学習	山田信雄、大中原弘、山岡博哉、須山健太(島根大学)	4	31	海士中1年天山スキー教室
	22~3月末	島体験居住	島内の自由な体験	中川健太他	7	112	海士町、海士中学校
2	9~3/23	インターンシップ	役場、遊びの広場、中学校等	デュボア、マルレーヌ、アドリース(甲南女子大学)	1	68	海士町、慶應保育園、さくらの家
	4~24	インターンシップ	1000時間体験学習	藤本昌克(島根大学)	1	59	教育委員会、海士小学校
2	16~22	ゼロ社キツアアー(yes、andなハキリイ&ビジョン)	冬場の船、海士を体験	磯原ひかる	10	80	海士町、ひらまんぼう、海士中
	人数計					693	3,846

(4) 主要な実施活動から見てきたものは・・・

全体として、双方参加者の意識変化が挙げられよう。例えば、観光であれば、豊かな資源・資産を目的に、サービス、人との交わりの順であるが、今回の感想を聞けば、まずは、『人々』の元気を挙げ、『もてなし』やうちに感激、そして豊かな『資源・資産』に感動する。海士町の出会い、双方からの評価(WIN-WIN 構図)のキーワードをあてれば、自信×共感、自覚×享受、気付き×感動、当たり前が凄い等々が浮かぶ。交流からの変化は、視野の広がり、表現力の豊かさ、コミュニケーション力、キャリア・職業体験教育等々での実感か。

発見としては、口コミとメーリングリストによる発信/イベント(全国募集)開催と口コミツアー参加、その面白い波及力の凄さ！

図 3-1 主要課題整理概念図



親類・友人知人・見知らぬ人まで連鎖反応、それでも地元には伝わっていないことの多さ。

【周知広報の工夫・徹底の重要性】また、活動継続意欲は、凄いものがある。継続の為に、双方の努力は勿論、それをつなぐコーディネーター数名の必要性を実感した。地理条件から交通の連絡と交通費の問題解消は当然。

【人的・財政的継続支援の必要性】加えて、交流事業の中から、地元若者の立ち上がり、受け皿づくり・まちづくりの核への参画意向、そして双方の活動協働継続の意欲充満【民間主導への支援】等々。元々、海士町は、「海と人」が資源。海士町にしかできない青少年の為の一貫した特別教育機関設置（海洋学全般と離島生活）も頭を霞める。

幾たびものAMAワゴンでやってくる20~30名の都会の大学生群、夏の時期、遠くフランスからの参加学生・アジア諸国の留学生達、この年代が極端に少ない過疎の島で、小・中・高校生により刺激を与え、彼らにも確実な変化が現れてきている。それを察知した地元の保護者の方々からも確実にこれらの活動の理解と支援の輪が広がってきている。地元の若者も目覚めてきており、受け入れ態勢も「地元の若い者でやらねば」という意識が芽生えつつある。

参加した学生・留学生達は更に、地元での各種体験事業を通じて、地元の人々との交流を深めた。その結果、数多くの海士ファンを生み出すことになり、再来島する「リピーター」も確実に増えた。

吟行ツアー参加者からも、強く、地元の人達との交流、生活体験を望む声が挙がる。

雇用の増大・定住促進が必須の海士町にとって、これらの活動の結果から、即、正常な人口構成ピラミッド形成へとは望むべくも無い。定住・2地域居住・リピーター・WEB人口の内・外『やうち』ネットワーク構築による海士町版交流連環1万人人口構成ピラミッド形成への手ごたえは掴めたような感想を持つ。

図3-2 島にはいない大学生・留学生・外国人を中心とする若者層との交流から

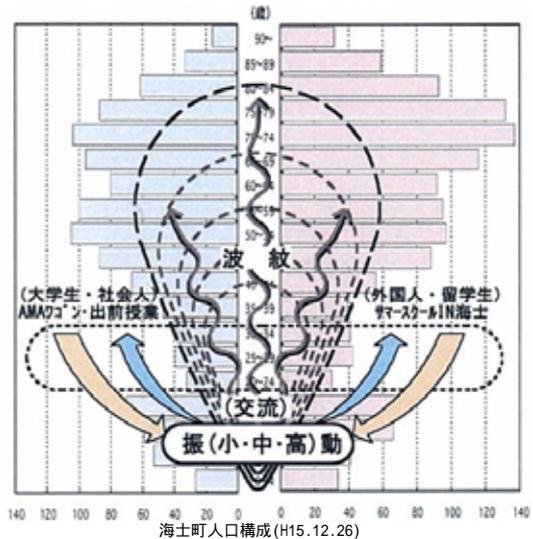


図3-3 出会い、双方からの評価 (win-win構図)

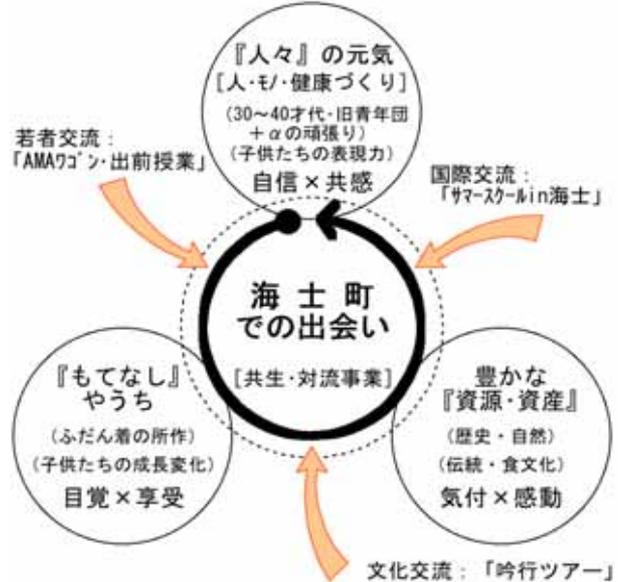
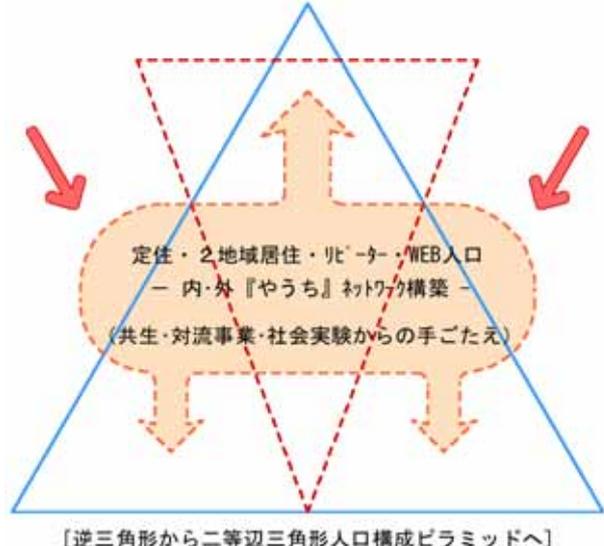


図3-4 内・外『やうち』交流連環1万人人口構成ピラミッド形成への手ごたえ



4. 今後の方向性

海士町では人・モノ・健康&資源を連環し、他地域と連携・交流を考えている。今回の共生・対流事業の社会実験諸活動での協働展開の可能性から、様々な芽ばえがあり、育成への双方の自信も醸成された。しかし、今回の反省と展開の中で、助走から1段階（ホップ）の公的支援は多様にあるが、次の2段階（ステップ）に移る際の支援が無い。それ以降（ステップ&ジャンプ）については、自立的展開を目指すべきだが、その躓きで挫折することが多いのも現実。その柔軟な支援が望まれるところである。

次年度以降の展開として、海士町地域づくりの柱・雇用の場の創出/魅力的な地域情報発信/ある程度のインフラ・環境整備と共生・対流システムの構築・推進を連携させる。AMA ワゴン・出前授業関連では、未来を支える人づくりに向けて、交流・教育力の育成・強化を柱にする。具体的には、出前授業の継続、他地域との協働イベント企画開催運営、島内遊休跡地・施設有効活用への取組。菜種油を原料としたECOバス全国走破、環境問題への取組をテーマとして、地方間繋がり情報発信活動に着手、及び原料栽培、加工可能他地域との交流連携推進などを目論む。加えて、サマースクール in 海士を契機に、仏人との交流から仏国の何処かでの交流を機にアンテナショップ展開を模索する。また、他の活動の継続は勿論のこと、今年度できなかった企業（従業員・会員）、シニア層（NPOシニアボランティア協会等）との社会実験にも再チャレンジする。

海士町での近年の取組は、「持続可能な開発の為の地域づくり・サステナブルな町づくり」の追求。今までの開発とは、まったく逆の発想が鍵。小さい者ほど勝ちやすい。大きい者に追従（最後尾）から、小さくても最先端へ。持続可能社会への先導役「タグボート海士」発進中である。“ 辺境『海士』から日本を変える・世界を繋ぐ ” を合言葉に！！

図 4-1 離島・過疎地域“海士町”ハンディ克服/～限りなき前進、そして、確かな明日へ～

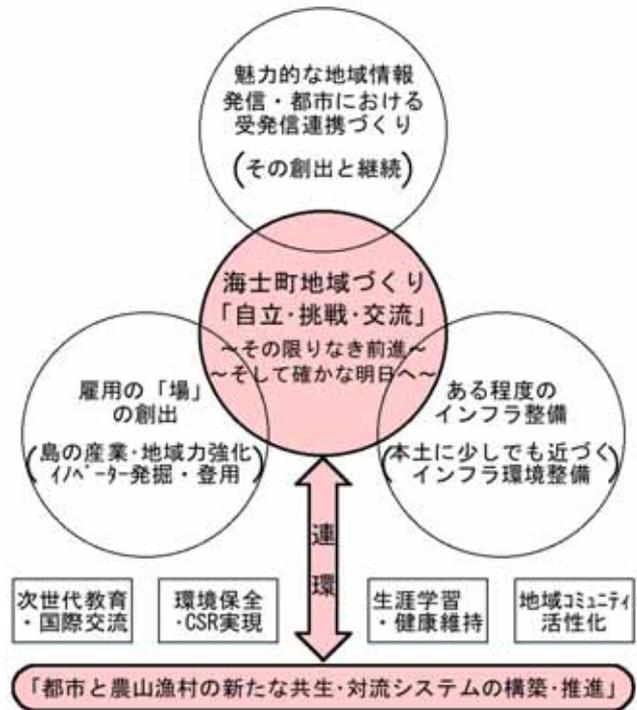


図 4-2 海士町地域づくりステップアッププロセス 必要支援展開概念図 (共生・対流事業継続展開ともあわせて)

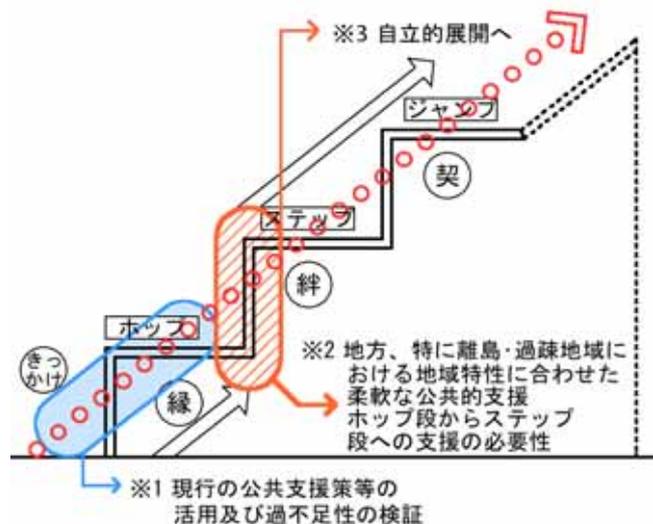
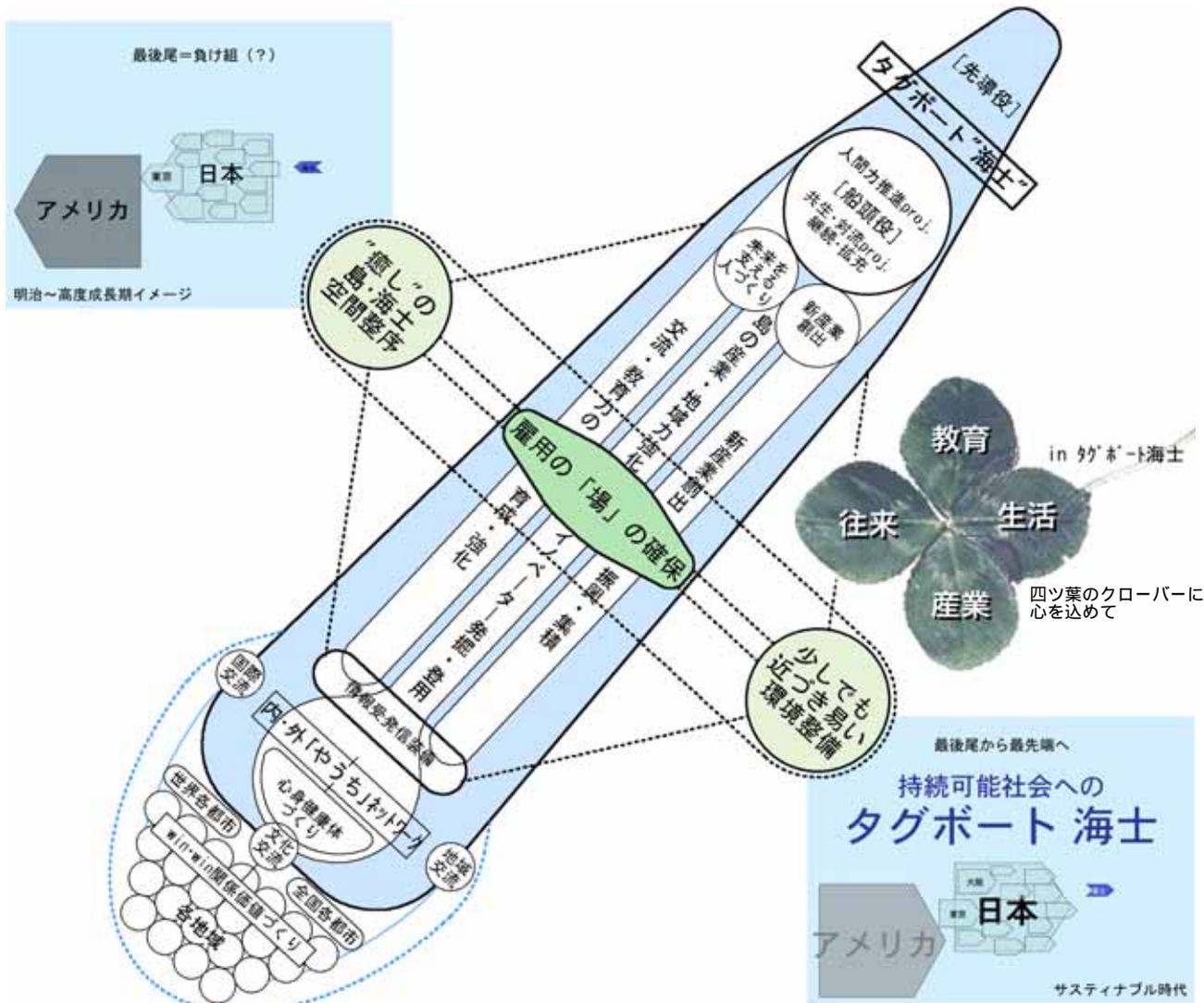


図 4-3 最後尾から最先端へ：海士町地域づくり・タグボート海士展開



5. 総括

本年度の『共生・対流事業』その社会実験の取組は、参加双方、期待以上の成果を得、課題も明確になったように思う。

成果の一端として、交流事業を契機に、数名の若者が海士に定住！ 4月以降、交流事業で、延べで300名の若者が海士に訪れる。地元の若者の中にも、まちづくりに積極的に参加する機運が生まれる。海士中2年生が、「わたしのふるさと海士について」と題して、弁論大会で発表し、隠岐地区で最優秀賞、県大会で島根県教育長賞受賞。そして……

課題としては、離島という交通条件の克服をベースに、周知・広報の工夫・徹底、人的・財政的継続支援、民間主導への移行・転換、等が挙げられる。

期待以上の成果を少なくとも3ヵ年継続、拡充発展させ、海士町地域づくりへと連環させる。日本・世界が求めるタグボート海士“島は日本の明日を創る海士、ここでしかできない“島まるごと未来学校”(海と『人』・『モノ』・『健康』)づくり 人間力推進センター設立に繋げていきたい。そのイメージは、教育・生活・産業・往来の分野を融合させ、生活教育/産業生活/往来産業/教育往来等々の研究・実証・検証・克服、その四つ葉のクローバーデザインセンターをタグボート海士に載せて、活用展開プロセスを情報発信、他地域・各都市・日本・世界に受信交流させながら先導していくことか。